

----- (前回からの続き) -----

やり場のない気持ちと戦いながら、必死に場を取り繕おうとするチアキにとって、自分を元気付けようとモトコが楽しそうに話してくれているその場所は苦痛だった。こんなのないよ…。

「ちょっと悪い…会計もお願い…」こぼれそうになる涙を何とか我慢して、小さな声でそう頼み、席を立つのがやっとだった。モトコは事態を察したのか、ハッと思って振り返った。そこにはチアキが見た二人の姿があった。

深夜に掛かってきたモトコからの電話に、チアキは今までのことや、自分の気持ちを素直に話した。いつもは良くしゃべるモトコが黙って聞いてくれている。もう、自分の気持ちははっきりとわかる…。

チアキ「…す…き…なの」  
モトコ「わかってるって」

モトコは、自分の気持ちを正直に言葉にしたチアキを応援しなきゃと決めていた。後から入社してきたチアキには自分にはない謙虚さとかお淑やかさとかあってうらやましかったけど、チアキの嫌味のないモトコへの接し方についてしか親友と呼び合える二人になっていた。

チアキの気持ちを一通り聞いたモトコは、モトコなりに考えてモトコなりのアドバイスしかできないと思った。

モトコ「どっちにしても、きちんと言ったほうがいいよ。それからでもいいんじゃない。辛くなったらいつでも電話してきなよ。何時間でも聞いてあげるからさ」

「ありがと…」電話口からチアキのか細い声が聞こえる。がんばんなよ、チアキ、モトコは握り締めた受話器をそっと下ろした。

\*

それから数週間、ウェブデザイン部はてんでこ舞いだった。納期に間に合わせるために、チアキのグループにモトコのグループからの援軍もあって、人員配置とスケジュールに四苦八苦するチアキだった。タイチが率いる技術部が作った最新版プログラムとのリンクテストに、総合テスト、性能テストの立会い。アキコに同伴してのクライアントへのレクチャー。

忙しさがチアキの気持ちを助けていた。そして、何とかタイチやアキコとの接触をビジネスライクに済ませようと努力し続けた。でも、その時間はチア

キの心の中に変わらない何かを固めていくのに良かったのかもしれない。

モトコ「ねえ、ねえ、聞いたあ！アキコ先輩、会社辞めるんだって！」

モトコはここ数週間、チアキにどうなったとも、どうするとも言わずただ、普通に接してくれていたが、クライアントへの最終納品が終わって数日後、モトコが目の色を変えて飛び込んできた。

どうやらアキコさんはライバル会社で中堅のInfogenic社に引き抜かれたらしいこと、会社も事前にそれを察知していたこと、円満とは言わないまでも今回のウェブサイト納品を機会にスムーズに退職できそうだということ、モトコは育ててもらったこともあるし、割り切れない気持ちが残っていることなどを延々とチアキに話した。でも、チアキには途中から聞いたかったことがあった。

チアキ「それで...」

モトコ「聞きたいことはわかってるって。タイチさんは、この件には無関係だから安心しなよ」

チアキ「そうなんだ」

数週間を掛けて、どういうことがあっても、チアキは自分の気持ちに素直に従うことだけを心に決めていた。だから、今がタイミングってわけじゃない...。タイチ先輩には、自分らしく接して、自分の気持ちに従う。それだけ。

\*

残業が終わったチアキは開発ルームを覗いてみた。タイチ先輩がこのところ毎日、残業なのは知っている。案の定、タイチ先輩はコンピュータに掛かりつきりだ。

チアキ「ちょっと、いいですか？」

タイチ「驚いた。こんな遅くに。どうしたの？」

チアキ「もうちょっと、DOSについて教えてもらえたらと思って...。残りはもう少しだってメールもらってから、数週間経ってしまったけど、いいでしょうか？」

タイチ「えっと、じゃあ、あと、5分待って。30分くらいにまとめて話すよ」

タイチがてきぱきと仕事を片付けている姿を眺めているチアキ。自分と会う時、タイチ先輩の接し方はいつも変わらなかった。だから、自分もタイチ先輩と会う時、話す時は変わらないでいよう。気持ちだって変わらないんだから。覚悟を決めていたチアキの心は意外に静かで落ち着いていた。

タイチ「はい、いいよ。じゃあ、何かから話をしようか。delコマンドまでだったっけ？」

チアキ「はいっ、そうです」

タイチ先輩への接し方は自分らしくいこう。チアキはひとこと、ひとことに気持ちをこめようとした。タイチは予想外のチアキの元気さに戸惑った雰囲気だったが、何かホッとした様子で話し始めた。

タイチ「ええと、これから話すことがDOSの一番大切な考え方なんだ。今までの説明は、それを理解するためにあるようなものだと思って欲しいんだ」

チアキ「はい...」

タイチ「DOSにあってWindowsにないもの。その一つがリダイレクトってものなんだ。このリダイレクトを使いこなすと違う世界が見えてくるよ」

久しぶりに聞くタイチ先輩が説明するときの声色。大局的な話をするタイチ先輩の視点や考え方。チアキには、それが懐かしく暖かかった。

タイチ「でも、それを説明する前に標準入力(stdin)と標準出力(stdout)について説明するね」

チアキは例のノートを取り出しメモをし始めた。新しい言葉も出てきたけど、タイチ先輩はきちんと説明してくれる。チアキはそんな安心感も思い出した。

タイチ「通常、画面に出力されるテキスト文字は標準出力されているというんだ。つまり、標準出力というデバイスがあって、その出力先がたまたま画面であったと解釈するんだ。つまり、こういうこと...」

タイチがチアキのノートに"標準出力 = デバイス = 画面"と書き加えた。なんで標準っていうのかわからないけど、出力する装置って覚えればいいみたい。覚えるのは楽しいけど、やっぱり、DOSって専門用語多いなあ。stdinとかstdoutとかがって何の略なのよ。チアキが思った疑問が自然に口をついて出てきた。

チアキ「stdinとかstdoutって...？」

タイチ「standard inputとstandard outputの略だろうね」

なる。でも、standardって...わかるはずないよ。略しすぎ。それと...もう一つも聞いてしまおうと。

チアキ「じゃあ、標準ってなんですか？」

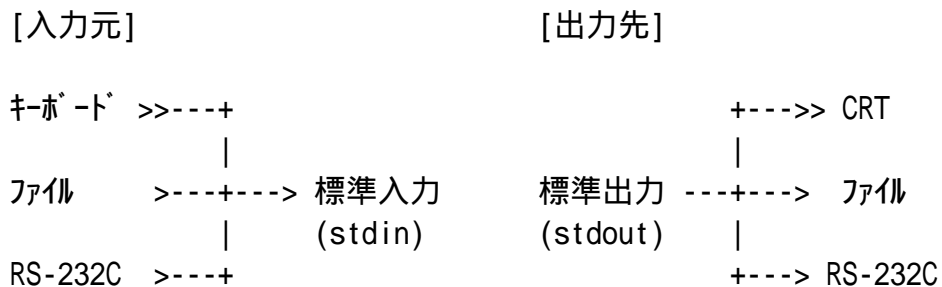
タイチ「改めて言われると説明に窮するなあ。100%正しい説明じゃないけど、今のところ何も指定しなくても入出力先として決まっているものくらいで思っておくといいよ。...ってわからないよね。この説明じゃ」

うなずくだけのチアキに悪いなあと思うタイチだったが、チアキの理解能力

の高さに期待するしかないという感じで説明を進めた。

タイチ「従って、その出力先がファイルであれば画面に出ていたテキスト文字は全てファイルに格納されることになるね。同じように、標準入力も通常は入力元がキーボードなんだけど、入力元をファイルとすることもできるんだ」

チアキは完全に混乱した。久しぶりにDOSの説明を聞いていることもあるけれど、今までのDOSの説明とは本質的に何かが違うような気がする。次第に顔が曇っていくチアキを見て、タイチはわからないのは当然だろうなという表情で、チアキのノートに大きく図を書き始めた。



標準入力がキーボードで標準出力がCRTの場合(打った文字が画面に出る)。

タイチ「こんなふうに、出力先・入力元を切り替えることをリダイレクトするというんだ。大丈夫、ついてきてるかな？」

チアキ「...」

タイチ「わからなそうだけど、一応、先に全部言っておくね。それで、">>"が標準入力とか出力のことね。何も指定しないときは">>"になっているってわけ」

チアキはじっとノートに書かれた図を眺めていたが、どうもすっきりしないという様子でやっと口を開いた。

チアキ「キーボードが入力で、画面が出力なんですよね。これって当たり前に思えるんですけど...」

タイチ「そうだよ。その当たり前をきちんと書いた図なんだ。キーボードに文字を打つと画面にその文字が現れる。そのことを示した図なんだ」

チアキ「でも、出力がファイルになるって、どういうことかさっぱりだし、入力がファイルになるってどういうことなのか全然わかりません...」

タイチ「誰だって、言葉だけで理解するのは難しいよ。まあ、百聞は一見にしかずってやつだよ。DOSで実際に試してみれば、チアキちゃんならすぐにわかるよ」

ほんとなああとにわかには信じられないチアキだったが、タイチ先輩が横にいて教えてくれることだけで安心できた。

タイチ「じゃあ、隣のパソコンを使うといいよ。Windows98だけど、DOSを起動して…。ルートディレクトリに移ってから、foobarディレクトリを作ってからそこに移動して。その後、dirコマンドを入力してくれるかな」

チアキは続けて、4行のコマンドを打ち込んだ。

```
C:¥WINDOWS>cd ¥  
C:¥>mkdir foobar  
C:¥>cd foobar  
C:¥foobar>dir
```

(略)

```
.                <DIR>          04-04-30  21:03 .  
..               <DIR>          04-04-30  21:03 ..  
0 個                0 バイトのファイルがあります。  
2 ディレクトリ    4,587.83 メガバイトの空きがあります。
```

タイチ「は、速いね！いつの間にこんなに上達したの！？DOSコマンドも完全にマスターしているみたいだし。凄いよ！さすがだね、チア…」

予想だにしていなかったチアキのDOSコマンド入力の速さに驚いて、そのままの気持ちを言葉にしたタイチだった。しかし、その言葉に喜ぶでもなく、ただキーボードをじっと見つめているチアキの姿はタイチに言葉を失わせた。

なんで…？メールでDOSを勉強している時の気持ちが戻ってきちゃった。ホントは「だってタイチ先輩のメールやリーフレットを一生懸命に覚えたから…」と言ってみたい。でも、チアキが選んだ言葉は違っていた。

チアキ「だって……せっかく、教えてもらってるんで…」

そして、キーボードを見つめて何かを考えているチアキの姿は、タイチにさまざまなおもいを思い起こさせた。深夜のメール、勉強した跡が残ったノートパソコン、ファイルのタイムスタンプ…。きっと、チアキちゃんは一生涯懸命に…。

タイチ「……」

タイチにも伝えたい思いがあった。

----- (つづく) -----